

くらし

saninトレンド 最前線

電気設備・通信システム設計施工のトーフ(松江市学園南二丁目、杉原実社長)が開発した視覚障害者歩行誘導マット「歩導くん」が、公共施設への施工で注目を集めている。高齢化時代に対応して、段差を極力少なくした製品設計は、すべての人に優しい商品として、内閣府の二〇〇七年度バリアフリー化推進功労者表彰を受けた。他のシステムと併用し、より障害者のサポートを充実させる取り組みも芽生えており、福祉分野の未来を導く技術だ。

(本社報道部・松本直也)

登山からヒント

同社は一九七〇年に創業。電気工事の設計施工やケーブルテレビの設備工事などを手掛けてきた。二〇〇一年、歩導くん開発に乗り出したきっかけは、杉原実社長(42)の父・同郎会長(68)に、緑内障で視覚障害が生じたことだった。

年間約四十回は山登りをするという行動派の会長は、視覚障害者が便利に行動できる方法を考えた。しまね産業振興財団と

歩行誘導マット開発 (トーフ)

なり、失敗に終わった。出した答えは床の点字ブロック。しかし素足でも使う屋内使用を目指したため、凸凹や角は抑えないといけない。アイデアを練る中、登山経験豊富な同郎会長の一言が決め手となった。

「山道では落ち葉のある所はくぼんでいる箇所。地面を見なくても踏んだときの柔らかさで道が分かる」。これをヒントに、柔らかいゴム素材を使い、白杖でたたいたときの音や跳ね返り、歩いたときの質感で誘導す

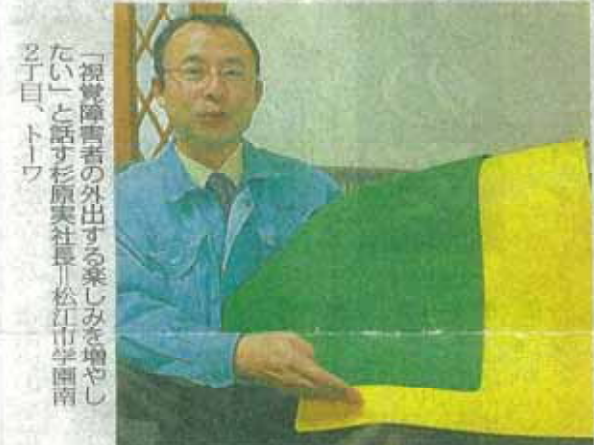
「思いやり」第一に模索

松江工業高等専門学校と共同で、白杖(はくじょう)の先に車輪を付け、センサーで誘導する方法や、リモコンで行き先を設定し、天井のセンサーが感知し音声で「次は右」などと知らせる屋内用誘導システムのデモ機を作った。しかし、地面の情報が分からないことがネックと

る、歩導くんの構想が出来上がった。

万人が便利さ共有
製造は自動車窓枠ゴム製造のイワクラ(島根県奥出雲町横田)が手掛ける。試作段階から開発に携わり、耐久性や難燃性のある素材の選別や、デザインなど

でもにも苦勞を重ねた。独自配合の合成ゴムでつくられた歩導くんは、長さ六十センチ、幅四十四センチのマット。人間工学に基づいて設計されたエッジ部分の厚さは一センチ、段差を抑えてある。歩いたときの足裏はソフトな上、ゴム素材で滑りもないため、歩いただけでも床との



「視覚障害者の外出する楽しみを増やしたい」と話す杉原実社長(松江市学園南二丁目、トーフ)

感触の違いが分かる。また、屋外で目にする点字ブロックと違い、表面に凸凹がなく素材が柔らかいため、申す所の歩行障害や、歩行時のひっかかりも少ない。高齢だけでなく、すべての人が便利さを共有できるユニバーサルデザインだ。色は緑と黄色があ

「福祉は思いやりの一言に尽きる」。同郎会長が、杉原社長に教えた言葉だ。視覚障害に限らず、高齢化問題を抱える福祉分野。優しいだけでなく、思いやりを持った取り組みが、人に優しい社会をつくる始まりとなる。

人に優しい 思いやりの取り組み

AM微弱電波発信器から施設情報を発信。約2.3メートルが受信範囲

ラジオは1620中国ヘルツに設定

ここはレストラン〇〇です

表面の凸凹や段差がない。車いす走行時のひっかかりや振動が無くスムーズ

裏面の凸凹が柔らかさを実現

「水木しげるロード」など観光地案内にも使用

くらしのアドバイス

バスタオルで保温効果

マフラーは襟元から熱を逃がさず、外気からも守ってくれるので、思ったよりは保温効果があります。実は夜眠るとさも同様なので

大判のバスタオルを掛け、布団の襟カバーにする形でみる。そのまま寝ている人の首や肩を一緒に包みこみます。ただし、乳幼児の場合はタオルで口や鼻がふさがるのを避け、こはくはくがっとうあで、方けさい。



もんじゃー！小へら用草！



内駒英

においが付かないように上着や鉄板をばかして口へ運ぶ。かばんを入れるのです。そして、パリパリおこげの上に半熟のさらに言うならドレーナーなど、生地、間はずっとモチモチ。気軽に洗える服装で臨むのが好。香ばしいね、珍味のうまみが効ましいのです。胸まくりも忘れて、豚にチーズにカレーに。何でも相性はばっちり決める、もんじゃよ、お見事！味、食感、アミューズメント性、うん、日本のスナック菓子の源流を見た気がしたぞ。(元山陰中央テレビアナウンサー・竹内駒英)